

精神疾患の娘から、学んだ家族のきずな

池田 正

二年前、当時二六歳になる娘が、夕方の犬の散歩時に、突然発症し、幻覚と妄想のとりこになり、丸一日中多摩川沿い(?)を彷徨した悪夢のような失踪事件が発生しました。警察にも捜査をお願いしました。幸い、第三者にも、影響を及ぼすことなく自分の力で、二十四時間後に、帰宅しました。

娘も犬も消耗しきっていたが、とりあえず、無事でした。まさに、奇跡的でした。それから、本人と家族との「精神疾患」の付き合いの始まりです。

還暦を迎え、ハッピーリタイア後の第二の人生への思いに至福のときを巡らしていた矢先の突然の出来事でした。

日頃、一家の大黒柱としての權威を、こわだかに言っていた私は、ただただ、おろおろ

するばかりでした。

感情が、爆発した娘が言うには、「いままで、両親の期待に、常に応えるようにと、いつも、従順ないい子を演じてきたが、もう限界だ！」と両親を強く詰り、暴力的な罵声で攻撃した。

信頼できる精神医療を行なっている適切な病院さがしが急務でした。それと並行して、本人が、治療の必要性を理解してくれるかが、最大の問題でした。

そのなかで、一番冷静に適切にアドバイス・対応してくれたのが、二歳年下の弟の存在でした。

小さい頃からコミュニケーションが苦手で、二十歳を過ぎた頃から、引きこもりがちだった姉の生活態度に、いたたまれなかったのか、早くから家をでて、大学で映像関係の勉強しながら、自力で、一人暮らししていました。

姉のことを、姉とも思わず、「オイ！」「オマエ！」と姉を見下していた弟でした。

その彼が、姉にこう言いました。

「ねえちゃん！一日中歩き廻ったことへの違和感は、あるだろう。

その違和感が、また悪さするかもしれない。

この際、徹底的に専門の先生に、治してもらったらどうだろう！」とおだやかに、話しかけました。

いままで、弟の言うことを全くと言って良い位、無視していた姉が、静かにポツリと覚悟をきめたかのように、言った。

「そうなのよね！なにか違和感があるのよね！」

もちろん、強制的な措置入院ではなく、任意入院となり、家族全員で、その病院へ連れて行き、適切な薬剤治療とカウンセリングが始まった。

入院後しばらくして、待合室で、息子がわれわれ両親にこう言った。

「おれの友達にも、重い・軽いは別にして、心の病で苦しんでいる人たちは、沢山い

る。

ねえちゃんの病気は、お父さんたちが、考えているほど奇病・難病ではなく、何かのきっかけで、だれしも、罹りうる病気だ。

大切なことは、病気で苦しんでいる本人の最大の理解者であり、支援者は、おれたち家族だ！」と。

責任のなすりあい等、まさに夫婦崩壊の危機にあったが、その一言で、世間体や体裁とまったくくだらない次元で、罵り合っていた私と家内のあさはかさをつくづく思い知らされました。

「ねえちゃんと、一定の距離をおいていたのは、当時の自分は、自分のことも悩んでいて、ねえちゃんの方まで受け止める余力がなく、自分も一緒に押しつぶされそうだったから、あの時、家を出た。

いまの自分は、なんとか、バックアップできそうだ！」と。

「目からウロコ！」とは、このことでした。

このときほど、池田ファミリーとして、「家族のきずな」を実感できたときは、ありません。

昭島市の保健師さん、地域生活支援センター、障害者相談支援センター等福祉スタッフの熱い思い入れに支えられ「精神疾患昭島家族のつどい」の設立・活動を開始し、この二年間で、何とか軌道にのりつつあります。月例会で、あらためて、当事者も家族も苦勞しながら、それぞれの立場で日夜修羅場のごとく、戦っていることを実感しました。

先般は、地域の社会福祉協議会主催の精神保健福祉ボランティア講座に、家族の立場で、お話をさせていただき、問題意識の共有を図れたのでは、と思っております。

家族のつどいで話を、我が家の夕食時、話題にすると、いまは退院し、自宅療養で

社会復帰を目指している娘も、自分の意見・体験をゆっくり確認しながら話をしてくれ
ます。

精神疾患は、やっかいな病気です。

金銭面・異性・人との付き合い等、そこから生じるストレスに対し、限りなく脆弱で
す。

回復には、「医療機関」だけでは不十分で、「理解ある家族」と「地域の福祉ネットワー
ク」が、バランスよく支えあうことが、必要不可欠だと痛感しております。

娘の入院騒動時期と重なり、お断りしようと思っていた民生委員の仕事も、今後の活動
の広がりにお手伝いできるかもしれないと思い直し、お引き受けするきっかけにもなりま
した。

民生委員活動は諸先輩方々により、高齢者・児童を中心に、盤石な活動が展開されてい
ますが、私の場合、微力ながら、精神障がいの方にも、地域に根ざした見守り支援活動

等を、ライフワークとして、手探りながら続けていきたいと考えている今日、このごろです。